巻頭言

理論と実践の往還について

松尾　敏実*

The Interaction between Theory and Practice

Toshimi　MATSUO*

本研究科の目的は,教育現場の諸課題に対応し,課題を解決できるような「理論と実践の往還」による高度な専門性と実践的な指導力を備えた教員を養成することである。この目的が達成できるように,「課題探究」と「理論と実践の往還」の２つをカリキュラム原理として，教育課程が編成されている。そして，このカリキュラムのもと既に 4 期生まで修了し，全体で 81 名の修了生が学校現場や教育行政で活躍している。

一方，学校現場の状況をみると，新学習指導要領への対応やいじめ・不登校，特別支援教育，ICT 活用，働き方改革など様々な課題があり，中でも 2020 年度，2021 年度は，新型コロナウィルス感染症への対応で大変な状況にある。したがって，学校現場では，このような複雑で多様な課題の解決に向けてリーダーシップを発揮できる教員が求められており，まさに，本研究科の果たすべき役割がそこにあるのではないかと考えている。

さて，本研究科の実務家教員となり 2 年目が終わろうとしている。少しずつ授業や実習にも慣れてきたところであり，カリキュラムの基本的な考え方にもなっている理論と実践の往還についても自分なりに多少は捉えることができるようになってきたように思う。

この「理論と実践の往還」については，教職大学院の拡充を求めた平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」の中でも，今後取り組むべき課題の一つとして,「教科や教職についての基礎・基本を踏まえた理論と実践の往還による教員養成の高度化が必要である。」と指摘されており，理論と実践の往還を重視した探究的実践演習や理論に裏付けられた新たな教育実践を生み出していく方法の開発などが求められている。

では，理論と実践の往還の考え方を具体的にどのように実現していくのか。例として，教育経営探究コースで取り組んでいる学校変革試行実習を紹介する。この実習では，まず，現職教員の院生が学校の現状分析を行い，解決すべき課題を設定し，解決していくための理論研究を行い，研究計画を作成し，それに基づいて，実際に学校の中で実践を行い，その内容について理論と照らし合わせながら考察を行い，成果と課題や今後の展望を整理してまとめていくという流れで行っている。院生は，この実習を通して，学校改善に取り組みながら課題解決の方法論を学んでおり，この実習を参考にすれば，学校現場に出ても様々な課題に対して，同じように理論研究を行い，実践に取り組むことで解決に導くことができるのではないかと考えている。他のコースでも同様な探究実習が設けられており，同じように理論と実践の往還を念頭においた実習が行われている。このような実習や授業をとおして高度な専門性と実践的な指導力を備えた教員の養成に取り組んでおり，今後も本研究科で学んだ修了生たちが，理論と実践の往還を踏まえて学校現場の課題解決に貢献してくれることを期待するものである。

最後に，本研究科の岡先生が今期でご退職になる。また，３名の客員准教授の先生方も任期が今年度までである。先生方のこれまでのご尽力に対して敬意を表して巻頭言とする。

（2022 年 1 月 28 日　受理）

*佐賀大学大学院学校教育学研究科